

タイ国ワットパクナム訪問記

中外日報記者 形山俊彦

タイへの道

タイは一度は訪れてみたいと考えていた国だつた。国民の九四%が仏教を信仰する仏教国というイメージ、あるいは“微笑みの国”との観光案内に、かつてなイメージをふくらませてしまつたのかも知れない。だが、もう少しはつきりとした思いもあつた。

「タイへ一緒に行きませんか」と、思いがけず声をかけて下さつたのが、横浜市港南区日野町の曹洞宗善光寺住職黒田武志師である。鎌倉や湖北の仏たちを撮影して仏教界にも知られるうちに、胸の中にはまだかかる何物かを感じ

日本仏教の現実的側面を取材する毎日に追われるうちに、胸の中にはまだかかる何物かを感じ

写真家の駒澤晃氏と三人で、雨安居中のワットパクナムを特別に取材してみないかという話だった。

願つてもないチャンスではないか。黒田住職は二十三年前の昭和四十一年一月、大本山總持寺の特別僧堂第一期生としての修行を終えて中外日報社の第二回インド仏蹟巡拝団に道友とともに参加し、その足でタイのワットパクナムへ入つて得度修行、以後も何十回となくタイを訪れている。この人に案内してもらえば、初めてのタイも痒いところに手が届くような旅になるに違いない——そんな下心も動いたようだ。

仏教のふるさとインドへは昭和五十九年一月、中外日報社の第二十回インド仏蹟巡拝団の随員として派遣してもらい、そのヒンドゥー的世界に触れて圧倒された経験がある。インドに仏教はないと言われ、事実、仏教遺跡を除いては日本人の私たちが考える仏教的なるものは存

在しなかった。しかし、およそ時間というものを超越したかのように思われるインドの村や町を歩きながら仏蹟地を拝したとき、その遺跡が間違いなく仏教への信によつて築かれたものであるという事実が歴史を超えて迫つて来るのを感じた。

仏蹟は日本の仏教徒の感情移入によつて瞬時、蘇るだけであつて、保護された遺跡に過ぎないともいえる。だが、私の見た夜のブダガヤ大塔はチベット僧の巡礼団による五体投地の礼拝行と読経の声に包まれてそびえ立ち、壁面に灯されたロウソクの明かりが現し世の淨土のように金色の炎をくゆらせていた。

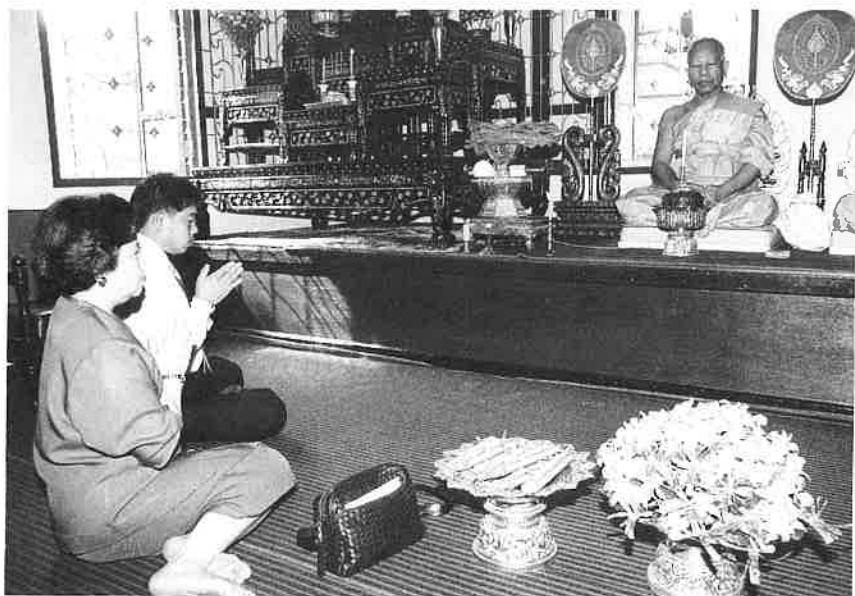
靈鷲山の法華經の会座から見おろす緑の小宇宙。幾何学模様に組み立てられたナーランダ大学遺跡の赤い煉瓦群は、仏教を学びとろうとする学僧たちの情熱といのちの輝きを物語つていた。インドは仏教の聖地である。しかし、振り

返つて日本仏教を考えようとするとき、比較すべき生きた仏教がインドにあると言えるだろうか。

次に行つてみるべき国はタイしかないと、いつしか心に決めていた。「仏教の歴史は異端の歴史」とまで言われる。中国から韓半島を経由して日本に伝来した仏教は、民俗化の過程でそれぞれに変容をとげた。それに対し、根本主義的立場を主張する学者からは、変容した仏教は釈迦仏教に非ずとの批判がぶつけられる。しかし、中国的変容も、日本の変容も、すべて呑み込んで生き続けているのが大乗仏教の歴史であることは事実として認めるしかない。そうしたことを考える上でも、南方上座部の戒律厳しい仏教の僧伽の実際の姿をこの目で見ておきたいと思つていた。

東京—タイ間を就航して間もない全日空の916便は予定より三十分遅れて午後四時五十分に飛び立つた。隣の駒澤氏は口元に髭をたくわえ、忍者のようないでたちに見える。出来るだけ身軽なスタイルでタイへ乗り込むつもりらしい。二台のカメラを取り出して準備をしている

雨季の首都へ



朝から施しをする信者があとをたたない

左手首に小さな数珠がはめられていた。

タイとの時差は二時間。約六時間でバンコクのドンムアン国際空港に着く。ゲートを出ると夜の九時。チャオプラヤ河(いわゆるメナム河)のほとりにあるシャングリラホテルに入った時は十一時を回っていた。日本時間では夜中の一時過ぎである。雨季のこの時期、気温は三十二度前後になる。しかし私たちの訪問中、最後の一日を除いてバンコクは曇天でやや涼しく、暑苦しい東京からタイへ来たおかげで、暑さはさほど気にしなくて済んだ。

静と騒の朝

翌日は早めに起床し、六時にホテルを出る。

朝の街を見なければバンコクへ来た甲斐がない。タイ僧の托鉢風景をぜひカメラに收めたいと駒澤氏と前夜話し合つたところだつた。暁闇の頃、掌の筋が見えるようになると、僧たちは

ワツト（僧院）から黒いバーツ（鉢）を抱えてピンタバート（托鉢）に出る。黄衣をまとい、素足で歩く姿を写真などで見ると、それが南方上座部仏教のすべてを象徴しているように思われたものだ。

驚いたことに、大通りに出ると、まだあたりはうす暗いというのに、街はもうたくさんの人々が動きだして活気を呈している。街角のあちこちに屋台が出て、揚げ物や麺類を売りはじめている。屋台といつてもリヤカーを改造したもので屋根のついたものや、自転車をつないで移動できるようになしたものもある。

ベンツのマークを着けたバスが走る。トラックを改造した乗り合いバスや、懐かしいオート三輪の「ダイハツミゼット」を改造したサムローと呼ぶ乗り合い自動車、それにバイクがあふれるほど次から次と走り抜ける。乗用車はたいへんダ、ヤマハである。大型のバスになるとベンツになるが、改造の得意なタイ人の手にかかるものだから、外観はベンツでも中身は別物とうこともあるらしい。

喧騒の巷をよそに黄衣の僧が黙々と歩いている。うす暗い街角を、まるで裸のからだに黄色い衣を巻き付けたような姿の僧が列をなして歩く。不思議にその異形が街の風景に融けこんで、違和感を与えない。道を行く人々も、僧に特別の関心を払うわけでもないよう見える。

大通りに面した商店の前にテーブルを出して、その上に幾つものビニール袋に取り分けた食べ物を並べて待つ中年の婦人がいた。袋の中には入っているのかまでは確認出来ない。やがて托鉢の僧が婦人の前に来て立ち止まる。婦人は合掌し、おじぎをしてからビニール袋の一つをつまみ上げて僧の鉢に入れ、再び合掌する。

僧たちはゆっくりと列を作り、順番に供養を

受けている。布施行が無言のうちに繰り返される。別の場所では僧の前に進み出た男性が、合掌して布施したあと、そのまま道路に正座して深々と額^{ズキ}礼拝した。両親に伴われて供養する女の子もいる。施す方も多くは素足になつている。

托鉢コースは決まっているのだろうか。亡くなつた人の供養の日などに、特別に施しをする人もいるという。僧たちは持ちきれない施物を途中で一ヵ所に置いたりしながら、再び歩いた。この托鉢で得た糧^ガがタイの僧院の朝、昼二食を支えている。

タイの朝はまさに豊饒の風景ではないか——布施行がこのよだんな形で日常化していることに思ひめぐらせてそう感じた。南方上座部仏教のすべてを象徴する風景であると考えたとしても、それほど間違つてはいないだろうと思われた。しかし私は、この後、黒田住職とともに訪問し

たワット・パクナムで、タイ仏教の大きな変化の姿に直面した。そのことから、日本仏教との比較をより鮮烈な形で迫られることになる。

おびただしい僧房群

チャオプラヤ(メナム)河をはさんでバンコクの対岸にあるトンブリ地区は、ラーマ一世によつて一七八二年からバンユクを首都とするクルンテープ王朝が誕生するまでの十五年間、王都の置かれたところである。タイは東南アジア諸国の中で模範生と言われる成長ぶりを見せており、首都バンコクはあらゆる機能が集中するタイ最大の都市である。トンブリは、いわば副都心とも言える位置にあるが、肥大化するバンコクに較べると、静かな郊外の町といった趣だった。

バンコクを南北に流れるチャオプラヤ河の支流は街の中を縦横に走つていて。人々は川とと



200人程の僧侶が食堂で朝、昼食を共にする

もに生き、川の上で生活する多くの人々がいる。

「茶色の濁流で食器を洗い、衣類を洗い、歯も磨けば身体も洗う。この濁流の上を何十艘もある舟が、せめぎ合いながら水上を行き交い、食料品や日用品を売っている。おかゆやめん類の朝食も、この舟の上で作って売っている。まるで動く市場といつてよいだろう。水は空気のように人間と関わっている。私が修行したワット・パクナムもそんな川べりに建っている」

— 横浜・善光寺の黒田武志住職は、運河のある街の風景を、かつてこんな風に描写している。チヤオプラヤ河の支流を船で渡つて、トンブリにあるワット・パクナムのすぐ裏手へ至ることも出来る。私たちはホテルからタクシーを走らせた。

タイには約二万五千のワット(僧院)があり、約三十万人の僧侶を数える。通常は二十万人の僧がいるが、この国には一生のうちに一度、二

十歳に達する男子が剃髪して得度出家し、僧院生活を過ごすことを最大の功徳とする社会習慣があり、七月下旬から十月下旬にかけてのパン

サー（雨安居）の時期にウパサンパダ（得度式）を受ける一時僧が増えるため、僧の絶対数は一定しない。

黒田住職が一年半の修行生活を送ったワットパクナムの名は、わが国にもよく知られている。戦後、ここで修行した日本人は約八十人にのぼるといわれ、黒田住職が大本山總持寺特別僧堂で同安居の群馬県雙林寺住職石附周行師と一緒に、インド仏蹟巡拝の旅から引き続いてワットパクナムに入門した昭和四十一年には、高野山真言宗の佐々木弘伝師が修行中だった。

日本とタイとの仏教交流は戦後、ますます足しげくなり、深まつた。遡れば明治二十年（一八八七）九月二十六日、「日タイ修好通商宣言」が調印されて以来、日本はタイと共に皇室・王室

を戴くアジアの国として、政府・民間レベルでの着実な交流の成果をあげている。

親善の証として明治三十七年（一九〇四）、名古屋に日泰寺が建立され、仏舍利が奉迎された。昭和十年にはバンコク日本人会により日本人納骨堂が建立されている。日本人納骨堂建立の最大の功労者の一人が高野山真言宗の横浜・増徳院住職藤井真水師であり、また、日本人納骨堂奉贊会の初代会長で、現在、バンコクに本部を置く世界仏教徒連盟（WFB）の本部事務次長をつとめる小谷亀太郎氏が、タイを訪れる日本人が僧俗を問わず世話になつた日タイ親善の蔭の尽力者であることを忘れてはならないだろう。

話が少し横道にそれた。ワットパクナムの伽藍を見てみよう。運河沿いに開かれた境内に、本堂、ワット・パクナムの中興の祖ともいうべきチヤオ・クン・モンコン・テープムニーの遺骸を安置するブン・ホー（有徳の堂）、住職の住む

房、瞑想堂、大食堂、宝物館、図書館、位牌堂、そして、それらをはるかに上回る数の僧房がアパートのように立ち並んでいる。

あとで詳述するように、ワット・パクナムはタイの他のワットと根本的に異なる生き方をしている。それは、すでに記したように、伽藍の中に大食堂をもつてていることである。この大食堂に付属する台所によつて、僧院に生活する比丘や沙弥たちの食事がまかなわれている。実際、午前十一時にはじまる昼の食事風景を取材して、五百人もの比丘や沙弥が台所から運ばれた食事をいっせいに食べる様子に、圧倒される思いだつた。

典座制度を僧院に導入

それにしても、ワット・パクナムで見た典座をどう理解したらいいだろうか。

南方上座部の僧は托鉢によつてのみ糧を得



食事の用意をするメーチー

て、自ら煮炊きしたり金錢を扱わない定めにな

つており、食事に関する戒律は細部にわたつて
いる。もつとも、美食は慎まなければならない

が、僧の食べ物が精進料理でなければならぬ
という考え方にはタイではない。

基本的なことは、正午から翌日の夜明けまで
に食事をすることが禁じられている点で、早朝
のピントバート（托鉢）から帰つて朝食をとり、
昼は十一時に食事をしたら、それで終わりであ
る。

しかし、ワット・パクナムの台所は日本でいえ
ば永平寺の典座寮のような活気を呈していた。
料理を作るのはメーチーと呼ばれる剃髪した女
性たちで、彼女たちは白衣を着て、出家した修
行者と同じように日々精進努力している。私た
ちには尼僧と同じように見えるが、かつて存在
した三百十一の戒律を守る比丘尼は今日、タイ
の僧院から消滅し、現在は、十戒を持つ沙弥

に次ぐ八戒を守るメーチーしかいない。

あれこれと考えるうちに、いささか混乱して
きた。

ワット・パクナムが独自の生き方をはじめて
から、半世紀ほどになる。その歴史を振り返る
には、ワット・パクナム中興の人、弟子たちから
「ロンボー（父の意）」と親しみと尊敬を込めて
呼ばれ、「プラ・モンコン・テープムニー」の称
号をもつチャオ・クンについて知る必要がある。
昭和五十九年秋、ワット・パクナムでチャオ・
クンの生誕百年祭が挙行された。それを記念し
てチャオ・クンの像をまつる礼拝堂が建立され
た。像はチャオ・クンが瞑想する坐相をかたど
つたもので、在俗の信者たちが貼りつけた金箔
で全身が覆われている。

お堂の横に三階建てのパーリ研究所がある。
その階上にチャオ・クンの遺体がミイラとして
今も安置されている。このため、この建物は「ブ

ン・ホー」とも呼ばれる。内部は、正面に棺が置かれ、その前にロウ人形のチャオ・クンの像がまつられており、信者たちの礼拝する姿が絶えない。このほかに、チャオ・クンの肖像は諸堂の随所に掲げられている。

チャオ・クンの生涯については、ワット・パクナムから発行している小冊子『チャオ・クン・モンコン・テーピムニーの生涯と教え』(T・マグネス著、藤吉慈海訳)に詳しい。それによると、チャオ・クンは一八八五年、貧しい農家に生まれた。九歳の時、勉学のため比丘だつた伯父の寺へあづけられる。十四歳で父親が死に、家業を継いだ。

同時にチャオ・クンは、修行時代に誓った通り、比丘たちが托鉢をしなくとも毎日の食事が出来るように、タイで唯一、そして、おそらく南方上座部仏教の歴史上においてもかつてあり得なかつたであろう、僧院に典座の制度を導入するという革命的な改革を成し遂げたのである。

舟で米をバンコクへ運ぶ仕事に明け暮れるうちに、チャオ・クンは盜賊に襲われ、死の恐怖を体験する。それがきっかけとなつて二十二歳の時、ついに出家を決意する。学問と修行の遍歴がはじまつた。托鉢で食を得ることが出来ず、

餓死を覚悟するほどの状況に追い込まれた経験の中で、チャオ・クンは「比丘や沙弥たちに食物が支給されるような台所をつくろうと心に誓つた」という。

施主らは下座から供養

十一時から大食堂で昼の食事がはじまる。時間になると、本堂周辺に黄衣の比丘や沙弥たちが僧房から続々と集まつてくる。私たちが訪問した時、ワット・パクナムには約八百人の僧がパンサー（雨安居）修行を行つていた。その内訳は、およそ比丘四百、沙弥百、一時僧百七〇八十、メーチー（剃髪の女性）二百。食堂の典座係はメーチーの仕事になつてゐるから、五、六百人もの比丘、沙弥が一斉に食事することになる。

からりと晴れ上がりつたタイの空の下で見る黄衣の群れは金色に輝いてまぶしい。本堂前の僧列は十一時ちょうどに大食堂へと移動しはじめた。内部は一段高い僧の座と、低い俗信者の座とに分かれている。正面にプラ・タム・パンニヤー・ボーディー住職が座り、その右手を端から端まで比丘、沙弥たちが座つて埋めた。下に



ワット・パクナム住職に食事を施す信者

は本日の食事の施主である信者たちが座つている。

住職の導師により読經がはじまる。ことし六十四歳になるプラ・タム・パンニヤー・ボーデ

イー住職の張りのある声がマイクを通して堂内に響く。日本でいう「食事五觀の偈」に当たる經文を唱え終わると、僧の身の回りを世話するデクと呼ばれる少年たちが食事を運ぶ。僧は三、四人ずつ車座になり、タライを伏せたような形の丸い食卓を囲んだ。

施主たちは供養する食事を僧に差し出す。とくに住職の前には食べ物や袈裟その他さまざまの施物が信者によつて施される。住職はにこやかにそれを受け取り、信者たちの合掌に応えた。

メニューは、卵、肉料理、野菜の炒めもの、スープなど、なかなか豊富な内容だ。大きなお盆に料理の盛られた小皿しんぎが七枚。その他にもフ

ルーツを盛つた皿などが横に置かれている。ライスとおかずをスプーンですくいながら食事がはじまる。台所ではメーチーたちも食事の座についていた。

僧たちの食事が済むと、今度は施主に対する儀式に移る。まず供養した施主に対してもお經が読まれる。施主は小さな錫の容器に入つた供養水を指にしたたらせながら、功德を授かるようにと念じる。願い事を書いた紙をコップの中で燃やす人もいる。読經が終わると、住職から施主に、額に入つた立派な供養の証明書が一人ずつ直接手渡された。この後、施主は僧の残した料理をいただいて食事をする。

ワットパクナムが、托鉢によつてのみ糧を得て自ら煮炊きしたり金錢を扱わないという戒律に生きるタイ僧伽において、典座制度を導入したことは、革命的な変革であると先に述べた。この事実は、中国の百丈懷海禪師が禪林の清規

を定め、僧団の自給自足を確立したという禪宗

史上画期的な出来事以上の衝撃を現在の私たちに与える。おそらく、南方上座部の仏教史上において、この事実の重みとその影響力は、将来にわたつてはかり知れないものがあるだろう。

瞑想と学習と

ワット・パクナムの修行僧の中に、日本からの

修行僧が現在二人いる。一人は男性で真言僧の渋井修師、一人は女性で臨済宗の尼僧の山本淨月さん。二人とも黒田武志住職が横浜・善光寺の開創十五周年記念事業として設立した善光寺海外留学僧派遣育英会の育英留学僧として修行中の身である。同育英会は、これまでに二十二人をタイ、アメリカ、インド、スリランカ、ヨーロッパ、韓国の各国へ送り、また外国から日本への留学生を受け入れてきた実績をもつ。ワット・パクナムへは二人を入れて六人が派遣されて

いる。

タイの僧伽に入れば、当然のことながら上座部の戒律を守る比丘となる。眉も剃って、すっかり黄衣が身についた渋井師と、白衣を着てメーイチーとして僧院生活を体験している淨月さんから、ワット・パクナムの機構やタイの仏教などについて、日本人同士の気安さからいろいろと話を聞くことが出来た。

今回の旅は特別だった。戒律厳しいタイの僧院内部をどこまで取材出来るだろうか、という不安が出発前にはあつた。通常の旅や取材で、タイの僧伽の修行生活をフランクな形で覗けるとは考えにくい。しかし、実際には、そんな堅苦しさは何も感じないで済んだ。ワット・パクナムのプラ・タム・パンニヤー・ボーディー住職と黒田住職との信頼関係が全てを許してくれたからに違いない。

タイの僧院で住職の権限は絶対である。法要

の模様や食事風景をカメラに収めるために堂内

を動き回る私たちの行動が許されたのは、住職
が事前にそれを了解していたからに他ならない。
プラ・タム・パンニヤー・ボーディー住職
は、黒田住職の顔を見るたびに「おー、よく來
た」といわんばかりに、満面に笑みをたたえて
自分の近くへ招き寄せた。その様子はまるで親
子の対面のようであつた。

そんなわけで、私たちは、おそらく初めて、
タイの僧院の台所の奥まで入り込むことができ
た。

典座の話に戻ろう。朝の托鉢をやめたワット
パクナムでは、毎朝、メーチーが食料品の買い
出しに出かけるという。その費用は信者からの
布施によつてまかなわれる。午前四時過ぎから
食事の支度にかかり、中食はまた別のメーチー
が当番となる。台所を運営するために、メーチー
は何組みかに分けられ、交替で典座の役をつ

とめている。

ワット・パクナムでは托鉢が消えてしまつたの
だろうか。いや托鉢をしたい人はしてもいいの
だという。しかし、実際には、ワット・パクナム
の比丘たちは、パーリ語の学習と瞑想に専念する
僧院生活を送っている。しかも、渋井師によれ
ば、こうしたスタイルの僧院が少しずつだが他
にも出てきているというのだ。

パンサー期間中のワット・パクナムの一日のス
ケジュールは次のようになつていて。

▽四時起床

▽四時半～五時半＝本堂スワットモン（読経）

▽五時半～六時半＝食事

▽六時半～七時半＝本堂スワットモン

▽八時～十時半＝講義

▽十一時半～正午＝食事

▽十四時～十六時＝講義

▽十七時～十八時＝本堂スワットモン

▽十八時半～二十時＝瞑想

▽二十時～二十時半＝僧房スワットモン

▽二十時半以後自由

比丘や沙弥にとつて、僧院でパーリ語の学習をすることは僧としての生活の最大の目標にもなっている。托鉢をしない時間を南方仏教の聖典用語であるパーリ語の学習と瞑想の時間に充てること——チャオ・クンがワットパクナムに食堂をつくった最大の理由もここにあつた。

大きい僧院には僧伽の教育機関として仏教専門学校が併設されている。そこでは仏教学やパ

ーリ語の教育が行われる。パーリ語習得の過程

は厳しい試験によって下級から上級までの段階があり、その等級とパンサー歴に基づく法臘などによつて僧階が決まるというから、パーリ語習得は僧の必須科目と言える。

一方、メーセーは沙弥に準じた生活を送るが、浮世のさまざまな悩みを僧院生活でリフレッシュ

ユして再び還俗してゆくという、現実的な関わりをする人も多いという。失恋や家庭問題など女性が遭遇する苦しみから逃れて出家し、あるいは仏教を学ぶ目的で、また、徳を積むために髪を落とす女性たち。その中に交じつて生活をする日本の尼僧の淨月さんは、ある意味では比丘として修行する渋井師以上に、タイ社会の隠された世界に触れていると言えるかも知れない。

タイ僧伽に新しい波

それは美しい光景だった。

私たちがワットパクナムの本堂へ向かって歩いていた時、一人の女性が渋井修師に供養を申し出たのだ。ワットパクナムで修行中の日本人真言僧である渋井師は、その場で傍らの木陰に腰を下ろし、正座して合掌する女性に対した。二百二十七の戒律を守る上坐部の僧は、女性にほんの少しでも触れることが出来ないし、女性





から直接施しを受けてはいけないと定められている。受ける場合は布か何かを広げて端を持ち、その上に置いてもらう。渋井師もその戒律に従い、供養を受けた後、何かにこやかに言葉を交わした。彩り鮮やかな本堂の色と南国の緑、あふれるほどの光の中で繰り広げられた黄衣の比丘と信者のひと時の交流の姿が、タイ仏教の永遠の姿を象徴しているようだつた。

仏滅後、教義をめぐつて仏教は上座部と大衆部に分かれ、さらにそれが幾つもの部派を形成していった。南伝のルートにおいては仏教の伝統は今日、上座部仏教として東南アジアに伝えられ、北伝のルートは大乗のエネルギーを膨らませながら日域へと及んでいる。私たちは仏滅後二千数百年という時間を経て、仏教の大きな二つの流れが行き着いた姿を同時に見ることが出来る。いずれが正しくて、いずれが間違つているかという問には意味がない。いずれもが

歴史の中で変容を繰り返してきたのだから。

そして、大きな変容のたびに原点回帰が叫ばれ、釈尊の教えの根本が求められた。変容を最小限度、現実的な部分にとどめるための努力が重ねられてきたのである。

ワット・パクナムの選択した変革はタイ僧伽どのように受け止められているのだろうか。それがタイ僧伽において公認されているものであることは明らかだった。その最大の理由は、現在ワット・パクナムの住職がタイ僧伽において最高位にある僧であるという事実が示している。

タイ僧伽の頂点に立つのは全僧伽の長であり、「ソムデット・プラサンカラート」つまり大僧正の僧階にある僧で、これはただ一人しかいない。次いで「ソムデット」つまり権大僧正、次いで「チャオクン・チャンピセート」（中僧正）と続く。

大僧正を会長とする僧伽の最高決議機関とし

て大長老会議があり、その構成メンバーは上記した僧階所有者のみとなつていて。現在、ソムデットは八人、チャオクン・チャンピセートは六人おり、ワットパクナムの住職はその六人の一人で、大長老会の構成員の一人になつていて。タイのトップクラスの高僧と言つてよいだろう。

もし、ワットパクナムの生き方がタイ仏教界で異端視されているとしたら、その住職がタイ僧伽の最高決議機関に加わるなどということはあり得ない筈である。タイ仏教界は典座制度を導入した“革命寺”ワットパクナムの生き方を認めているばかりではなく、密かにその行く末を興味深く觀察し、モデルケースとしているのではないかとさえ思われた。

わずか一日か二日の見聞で多くを分かろうとするのは極めて危険なことである。しかし、もう少しだけ飛躍して考えてみたい。チャオ・ク

ンが中国の百丈禪師にも匹敵する歴史的な改革をワットパクナムにもたらしたのだとして、その改革はやがてタイ僧伽全体を覆うものになるだろうかということである。

上座部仏教の僧は出家して厳しい戒律のもとに身をゆだね、すべての楽しみを犠牲にして儀礼の執行者として生きてゆく。タイの僧が社会とかかわるのはその儀礼活動においてであり、タイ人の生活の誕生から死に至るすべてにそれは及んでいるという。

僧伽は聖域として結界されている。僧が社会に対し直接に布教することがなくとも、ワットにあつて戒律を遵守し、修行に明け暮れる聖なる存在であることによつて礼拝の対象となる。人々はタン・ブン（徳を積む）を目指して喜捨しそれによつて僧伽が護持されている。持戒の生活は永遠に続いていく。

問題は、托鉢をやめることによつて、その基

本が崩れることがないかどうかということだ。

日本仏教の有り様を見ると、明治五年に布達された「肉食妻帯等勝手たるべし」との太政官布告が当時の仏教界を騒然とさせて以来、戒律の問題は仏教の存亡にかかわる重要な問題として常に論議を呼んできた。この布告が象徴するよう、結果として日本仏教は今日、僧俗の結果を失い、僧宝は限りなく世間に近づいている。

そのゆえにこそ、私たちはタイ僧伽に僧宝の伝統が生きている姿を見ようとしているのではないか。

山田長政の雄図を偲ぶ

ワットパクナムで、激しいスコールに遇った。日本の夕立とも違う。けだるい空気の中で、猛烈な勢いで空から雨が滝のように降り続け、それは約二十分で通りすぎた。

その間、境内にいた人々は本堂の屋根の下や

建物の中に入つて、ゆっくりとした時間を過ごそうとするかのように、ただじつとしていた。雨が上がるのを待つてワットパクナムを辞することにした。黒田住職、駒澤氏とともに副住職の部屋に挨拶に行く。副住職はプラ・パーオナ・コーソン・テーラ師。この僧は日本人の父とタイ人の母を持ち、日本名を「河北国雄」という。

タイの高僧の中でただ一人、日本語に堪能で、日本とタイの仏教交流に大きな役目を果たしている。チャオ・クン・モンコン・テープムニーについて得度し、チャオ・クンの生前に親しく瞑想法の指導を受け、ワットパクナムで現在その指導にあたっている。その穏やかな風格は、接する者を自然に和やかな気持ちにさせるものがあつた。

翌早朝、私たちは渋井師とともに、車でアユタヤへ向つた。バンコクの北八八キロの道のりを

約一時間半で到着する。船でメナムをクルーズする観光コースもあるが、これでは半日をつぶしてしまう。アユタヤは一三五〇年から四百七年間、アユタヤ王朝が栄えた古都で、十七世紀前半には約二千人の日本人が住み、日本人



チャオプラヤー川で水上生活者に昼食を売る。

町もあつたことで私たちにもなじみが深い。

朝露を踏みながら、かつての王宮の遺跡内を歩くと、ほぼ中央に巨大な三基の仏塔が天を突いて立っている。ワット・プラ・シー・サンペットと呼ばれる仏塔だ。

有名な観光地であるのに、遺跡は歴史の通り過ぎた形をそのまま残したように保存されている。緑の芝生と赤い煉瓦、そして色のはげ落ちた白い仏塔のコントラストを眺めながら、時の無い世界へ導かれていくような錯覚を覚えた。

「最勝吉祥王仏寺」と入り口の門に記されたプラ・モンコル・ボピットという寺院でタイ最大の高さ一八尺もある大仏を拝み、さらに少し離れたところにあるワットロカヤスッタ、通称『涅槃仏寺』を巡り、国立博物館を一覧して金や宝石など見事なアユタヤ王朝の重宝類にため息をついた後、日本人町跡を目指して田園の中を車を走らせた。

日本人町跡はチヤオプラヤ(メナム)河に沿つてある。現在、日本政府の出資により記念館建設のプロジェクトが進められており、その横の空き地に山田長政の靈位がまつられている。巨大な木まるで墓の代わりになつており、その前に塔婆と花が手向けられている。私たちがやつて来るのを見つけて、日本人目当ての商売人が、スカーフや絵はがきを売るために日本語で話しかけてきた。

すぐ横を流れる河には三艘の舟が岸にもやわれていた。山田長政はここから陸に上がつたと伝えられている。黒田住職は、この地に山田長政の供養塔を建てたいのだと語つていた。

私たちの旅は翌日、有名な王宮を訪れ、ワットプラケオ(通称・エメラルド寺院)、ワットトボーを参詣して終わった。実質三日間の駆け足旅行だったが、タイ僧伽への興味はさらに強まつた。

(完)



山田長政の供養塔の前で般若心経を唱える方丈と渋井さん